

## おおぎ会 歩こう東海道 57 次

# “お江戸日本橋へ”

### 第 24 回

平成 24 年 10 月 13 日から 14 日

2 大政党の党首も決まり、積み残した法案（選挙法改正・特例公債・選挙制度改正）等の 審議が早急に、始まるものと期待していたが、無駄だった。いまだ 国会開催時期不明？ 幹事長会談すら開かれず、完全に 足踏み状態だ！ これで 給料が貰える先生方って幸せ？ でも 私たちは先がない。STOP 出来ない。東に向かって進むのみ！



この企画の、誕生には 僕は立ち会っていないが、以後 継続され、24 回目。プロジェクトが、多年に亘るので、旅人達の体力が限界、早く “お江戸日本橋” に立ちたいと思う。

東海道は 1601（慶長 6）年、徳川幕府により、江戸から京都迄に 53 の宿駅を整備させた。京・大阪間には京街道 即ち 豊臣秀吉が整備を行った「文禄堤」があり、当時 豊臣家は まだ健在で、遠慮したのか、東海道を大坂までとは言えなかった。1615（慶長 20）年、大阪城が落城すると、大坂（高麗橋？）まで延長し 伏見・淀・枚方・守口の 4 つの宿駅を設け東海道 57 次とし、現在に至っている。

旅人	A	細田 庄一
	B	藤井 博伸
	C	中山 博夫
	D（記録）	足立 義明

（1 日目） 10 月 13 日（土） 晴れ

JR 由比 → 由比宿(16) → 正雪紺屋一本陣跡 → 蒲原宿(15)

→ 本陣跡・佐藤家 → 蒲原夜の雪 → JR 富士川

距離 9.80km（今日の歩行距離 20286 歩 \* 70cm = 14.20km）

台風 21 号も、沖縄の南で停滞！ こちらの停滞は、多いに歓迎！ その間隙をぬって出発する。前回よりも、遠方になってので、出発時刻を早めたのは良いが、駅までの足が無い…結局回り道を頼み 待ち合わせ場所へ！ 東の空が白み始める 早朝 6：00 時 長尾駅を出発する。

高速道を一気に刈谷 SA まで。休憩を取り、順調に進む。先方に “富士の山” が見えてきた。静岡インターより一般道に入る。R1 を東へ JR 新蒲原に着く。 駅前の駐車場に車を預け、JR に乗り換え 前回の終着 即ち 今回の出発点 JR 由比へ

御発ち JR 由比

JR 由比 から、歩き始める。時は 11：35 街道沿いの両側は、駿河湾名物桜エビを売る店が並んでいる。3 月からのエビ漁の時期は、多くの人買い出しに来ると聞いていたが、今は 漁閑期の午後 道行く人もまばら！ 来週の街道祭りの看板が目につくだけ。両側に民家が立ち並びその南には JR・R1 と東名が並走し 駿河の海は見当たらない。

R396 をしばらく進み、**由比川橋**を渡る。そのまま進んだが、当時橋（**玉鉾橋**）は、もっと河口に設置され、仮の板橋で、川が増水すると取り外したようです。やがて街道は鉤の手に曲がり（**桝形**）其の先に木戸があります。“**西木戸**”の表示があり、ここからが、“**由比宿**”である。

## 由比宿(16)



宿場は 東西の木戸間、およそ 600mの間に、本陣 1 軒・脇本陣 1 軒・問屋場 2 軒・旅籠屋 32 軒と、小さな宿場である。街道を進むと 2 体の旅人が、おおきな口を開け迎えてくれる“**おもしろ宿場館**”がある。

隣に 黒塚の内側に、洋風の建物が、目につく。聞けば 江戸時代の飛脚制度で造られ、明治に郵便取扱所となり、その後 局長が自宅を洋風の局舎として新築し、昭和 2 年迄は郵便局として使用され、現在は居宅になっています。玄関で おかみさんと思われる夫人が、名物のみかんを売っていた。細田君が買った。隣には“**正雪紺屋**”と続いている。



## 正雪紺屋

歴史で**由比正雪**と言う言葉を聞かれたと思うが、“**正雪紺屋**”（写真）は、400 年も続く、紺屋（染物屋）です。現在も 昔ながらの技法で商いを続けている様です。

正雪はここで 生まれましたが、江戸に出て、軍学者となり、私塾を開き、多い時には、3000 人の門火生を、抱えていたようです。3 代将軍家光の死の直後に、「幕府の政策への批判と浪人達の救済を目的」とし、丸橋忠弥・金井半兵衛達と、浪人を集め決起を企てましたが、事前に仲間の裏切にあい、駿府の宿で捕り方に囲まれ自害しました。享年 47 歳

これが世に言う「**慶安の変**」です。以後 4 代将軍家綱の時、従来の武断政策より文治政策に転換する転機となります。でも 正雪は大悪人 紺屋は悪人を排出した一家でしょう。罰が与えられなかったのが不思議？



## 本陣跡

道路右側には“**本陣跡**”が見えてきた。ここは「**遮蔽型本陣**」と言われ、街道に、家屋を直面させずに、建物を配置し、通り道に面して、門と木塀のみが作られました。間口 33 間（60m）・奥行 40 間（73m）の広大な土地に、物見塔・井戸等が残っています。



又明治天皇が、小休止された離れ「**御幸亭**」も残っています。

街道脇の水路は、馬の水飲み場でした。その役を終えた今日、数匹のカメが首を伸ばして、私たちを出迎えてくれました。今は“**本陣公園**”となり、母屋等は、復元されず、代わりに 近代的な大きいコンクリート造の美術館（**東海道広重美術館**）があります。館は 常設展示館で、浮世絵師広重の、版画関連の展示をしていました。入場料 500 円を払い見学。 大津絵を母体とした、版画の出来る迄・東海道 53 次の錦絵「**保永堂版東海道**」が一堂に展示されているのは素晴らしい。（当時は、通俗的には 街道 57 次ではなかった）



「由井宿交流館」でパンフを集めると同時に、お腹も空いたので、昼食（全員焼きそばを注文するが3人前しか無い！一人は握り飯）をとる。トイレも済ませ、東に向かう。西国大名の中には、江戸と領国との連絡に直属の通信機関（七里飛脚）を持っていました。この“お七里役所跡”（写真）は紀州徳川家のもので、江戸と和歌山（584 km）を、最短4日で連絡しておりました。



おおぎ会東海道24  
2012.10.13  
由比宿 御七里役所

先に“東木戸”が見えてきた。此処の“柵形”は雁行が小さい。元来 柵形は通路を雁行させ、見通しを悪くし、敵の侵入の防ぐのが目的である。これでは、敵が容易に、侵入する様に思われるが、当時は土塁が設けられ、防御されていたと思われる。



少し歩くと“一里塚跡”（写真左）やがて町はずれとなり道標が見えてきた。

これからはR396を“蒲原宿”目指し、右手に“JR 蒲原”を見ながら進む。清水区役所支所前のバス停で小休止、其の先が“蒲原宿”である。

やがて 蒲原3丁目の交差点左前方に“西木戸跡”（写真右）の標識が見えてきた。街道はここから、大きく左折します。これが“柵形”なのか？ もともと宿場は、西木戸より南側の、古屋敷と呼ばれる所でしたが、天禄12（1699）年の大津波によって、大きな被害を受け、蒲原御殿があったとされる、山沿いに付け替えられたので、このような“柵形”となった様です。



## 蒲原宿(15)



宿場は東西の木戸間、およそ1.15 kmの間に、本陣1軒・脇本陣3軒・問屋場1軒・旅籠屋42軒と、中の小くらい？の宿場である。“西木戸跡”に“茄子屋の辻”が示されています。

西木戸の近くに、青木の茶屋（茄子屋）があり、高松藩の槍の名手、大久保甚太夫が持っていた



槍の穂先に、丁度通り掛かった薩摩の、大名行列に触れたらしい。口論になり、70人近くを倒し、最後に、追っ手に捕まり殺されます。当時の竜雲寺の住職が、墓地に葬り供養したそうなの！甚太夫の槍の穂先は、寺の寺宝になっている！

現在の五十嵐医院の先を、道なりに右折すると、当時の面影を残す宿場群となる。

先ず 伝統的な町屋造りで、格子戸の美しい“増田屋” 国の登録有形文化財の“旧五十嵐歯科医院”（写真）町屋を洋風に、増改築され、外観はガラス窓を多用し開放的で、下見板は白ペンキとモダンな洋風・内部は和風としたユニークな建物です。

その向こうに“高札場跡” 向かい側に“御殿道（ゴテミチ）の跡” ここは 武田氏を滅ぼして、帰還する信長の労をねぎらう為に、家康が「蒲原御殿」を建てました。その後秀忠・家光により拡張されましたが、寛永11年家光上洛後は、使われなくなりました。（御殿道とは、御殿に、食料や日用品を湊から運ぶ道を示します。ちなみに 御殿山とは、御殿で使用する薪や山菜をとる専門の山で、一般の人は、入山できません）



おおぎ会東海道24  
2012.10.13  
蒲原宿旧五十嵐歯科



造られた物とは思われません。

すぐ近くに 明治 42 (1909) 年建設された建物です。寺院建築に多く用いられる檜を、ふんだんに使った“磯部家” (写真左) は立派です。特に一枚板の戸袋の木目は、素晴らしく、又 2 階窓のガラス面の波打ちは見事です。とても 100 年前に



## 本陣跡・佐藤家

蒲原宿の本陣は、江戸時代の中ごろまでは、東本陣 (多芸家) と西本陣 (平岡家) の 2 家でありましたが、18 世紀中頃 多芸家が絶え、以来幕末まで、平岡家が 本陣を務めました。平岡家は明治 11 年 京都に移転し、現在の建物は (写真右上)、大正時代の物ですが、邸内には、大名の駕籠を置いたと言われる“御駕籠石”が残っています。

道の反対側には、国の登録有形文化財に指定された“旅籠和泉屋”があり、当建物は 天保年間 (1830~44) に造られ、楕形の手すりや、看板架け、柱から突き出た腕木等 江戸時代最大の贅を尽くしています。又 安政の大地震でも、倒壊しませんでした。

先方左手に“問屋場跡”の交差点を右折し、山居沢川に沿って下ると“蒲原夜の雪”に行きつく。

## 蒲原夜の雪

歌川 (安藤) 広重は、天保元年 (1829) 幕府の内命を受けて、「八朔御馬献上」の式典の様子を描くため、初めて 東海道 53 次の旅を体験する。実際に、旅をしたのは天保 3 年とされています。

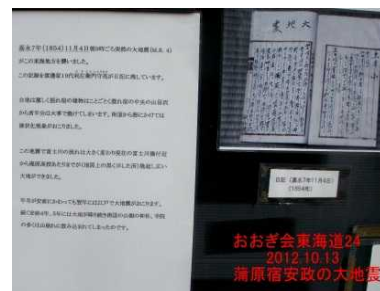
御馬献上とは、幕府より朝廷に、御料馬二頭を献上する、年中行事の一つです。其の時のスケッチや、印象を基に五十五図の、錦絵に纏めました。これが「保永堂版「東海道 53 次」であり、



そのうち特に“蒲原夜の雪”“庄野の白雨”“亀山の雪晴”は役物と言われ、最高傑作とされています。昭和 35 年 国際文通週間の切手に、採用されました。

又 問屋場跡に戻り東に向かう、国登録有形文化財で「なまこ壁」の塗り家造り 商家“吉田屋” 向かいには塗り家造りで、珍しく寄棟の屋根が美しい“佐藤家” (写真左) があり、当時の様子がかうかがい知れる。

道の右側の民家の扉に 安政の大地震について“渡辺利左衛門守亮の日記” (写真右) が展示され、読む内に いかにも大事故だったが、偲ばれる。寛永 7 年 (1854) 11 月 4 日午前 9 時ごろ揺れ始め大松倒れ・巾 20cm 長さ 150m の地割れ、そこから煙・田畑より水と砂石を、吹き出し 湖水の如し・西の方から火の手が上がり大火事 (宿場の西半分焼失)・当日 地震 40 回大変寒いが、裏の田に仮設を作り、そこで過ごす・・・等詳細に記されている。



やがて問屋職を代々務めた旧家で、木材商人の“渡辺家” ここの土蔵は 3 階建と珍しく、天保 9 年 (1838) に上棟したとの記載があり、隅の柱が少しずつ上に行くほど狭まる「四方転び」という耐震性に優れた工法を採用している。日軽鉄管路 (日軽第 2 発電所への送水管) を越すと、“東木戸跡” 街道は 僅かながら、鉤型となっている。ここで 宿場は終





と民家の間を進む。正面に小学校、その前を右折し、突き当たると“岩淵一里塚” 左右の塚が現存しているのは、珍しい。当時は5間四方の塚の上、に榎が植えられ（右側は枯れて昭和45年に植えられた2代目）（塚は道路拡張の犠牲になり肩身が狭い）、県の指定史跡となっている。

元来 幕府の指示で大きな川には、架橋は許されなかった。大きな川の両岸では、増水等により川留めが頻繁にあり、旅人は逗留を余儀なくされた。富士川も、西岸には“岩淵宿”・東岸には“本市場宿”と間宿が出来上がった。

## 間宿・岩淵跡

この辺りが“岩淵宿”で、どの程度の規模だったかは、不明ですが、黒い板塀と大きな門“小林本陣”（写真）が見えてきた。この建物は、安政大地震以降に、建てられたらしい。

曲がりくねった狭い道を進む、正面に富士川が見えてきましたが、水面までは高さがあり、地図通りに大きく迂回し、橋の西側に着きました。川の流れるは速く、水量も多い。



おおき会東海道  
2012.1014  
間宿・岩淵本陣

橋は、車道の横に自転車も通れる、歩道が併設され、富士山が最高に美しい。写真に収めながら渡る。左前方に小さな森が見えてきた“水神社”だ。氏子だろう？人々が、祭りの準備に忙しそう！ 当時 川は急流で暴れ川…川の魂を鎮める為に、設けられた神社だそうだ。川辺には“渡船場跡”（写真左）の碑があり、この辺を「船場」と呼んでいた。神社の前の道で、交通事故に遭遇。神社には交通の御利益は無いのか？ R396を東に向かう、左先斜めに進むと堤防に行きつく。江戸時代初期 古都氏が親子3代に亘り、築いた堤防で、“雁堤”（カリガネツツミ）と



おおき会東海道  
2012.1014  
水神社

呼ばれ、碑が建てられている。現在は、公園となり、富士山のベストアングルだ！ 地元の老人が丁度 雲がお山に懸る迄待つ……とても付き合えない。小さな祠があり、昔々 堤防を築くがすぐ流される。誰 言うとのなしに人柱が提案され、千人目の旅人をお願いする事となり、千人目にお坊さんが通りかかり、快く人柱になったとか（本当か？）……それを感謝しての祠とか？ 雲待ちの休憩をし、また R396 に戻る。



おおき会東海道  
2012.1014  
雁堤

## 間宿・本市場跡



おおき会東海道  
2012.1014  
間宿・本市場

もなく「潤井川」を渡り、高島の交差点を過ぎ、真直ぐ進むと「青葉通り」に行き当たる。一時 R139 へ すぐの 錦町北で県道 22 へ進むと、橋のたもとに“西木戸”が表示されている。ここからが“吉原宿”になる。

身延線 柚木駅先の、小道を左に進む。“札の辻跡”（高札場跡）を過ぎ、富士小学校前へ。この辺が、間宿 “本市場宿”（写真左）らしい。“一里塚跡”（写真右）があり、先に進む やがて本市場の交差点に出ます。交差点を横切り狭い道を更に進む。先方 富士総合庁舎の前に間宿・本市場の解説版と“鶴芝の碑”がありました。後は 見る物



おおき会東海道  
2012.1014  
本市場一里塚

## 吉原宿(14) (現富士市)

宿場は本陣 2 軒・脇本陣 3 軒・問屋場 1 軒・旅籠 60 軒と（天保年間）、大きい部類の宿場であったと思われます。





慶長6年 東海道の宿場として指定されたのは、今井・鈴川地区であり、現在では“元吉原宿”と呼んでいます。

しかし ここは、漂砂や高波の被害に遭い、寛永16年(1639)に、伊田橋村の西方に、所替えをしました。これを“中吉原宿”と呼んでいます。

その後、延宝8年(1680) 閏8月6日に、台風による高潮の被害に遭い、再び所替えをせざるを、得ませんでした。それが“新吉原宿”で、今日の場所(この辺の標高は5.00m以下?)になりました。

このように、吉原宿は2度の所替えを経験し、それに応じて街道も、少しずつ海から外れ、山側に移動しています。



“西木戸”からは目立った施設もないが、多くの人が 我々と行動を共にするのが、腑に落ちない? 中央町で左折をし、吉原本町通りに向かう。やがて 商店街入り口の交差点に、東海道大宮街道分岐点の“道標跡”があり、商店街には、多くの群集が屯している。今日は吉原商店街の「宿場まつり」 多くの人出 納得! 道路は歩行者天国 多くの山車やイベントが長く続いている。ここからが宿場の中心部“上本陣”・“旅籠屋鯛屋旅館”(江戸時代から続けている唯一の宿)・“問屋場”・“高札場”・



“脇本陣”・“下本陣”すべてが 祭りに飲み込まれ見学できない。只祭りを見学しながら歩く。それにしても宿場にふさわしい建物が見当たらない? 戦争で焼失したのか? 火災に遭ったのか? 県道172で交通制限も終わり、通行人も、ぐっと減った。やがて岳南鉄道吉原本町駅の脇を通り“東木戸”へ。和田川を渡ると“平家越えの碑”(写真左)があり、治承4年(1180)源平の「富士川の合戦」の際、近くの沼にいた水鳥が飛び立ち、その羽音に驚いた平家軍が、敗走したと言われている。(NHK 平清盛に出てくるかも?)



郵便局を過ぎ先方に“左富士の松”この辺が“中吉原宿跡”らしい和田川の向こうにその案内板があるらしい。伊田橋を渡り“左富士神社”(左富士に向かう途中の神社・北側には一里塚があったそうなの?)を横目に進み、新幹線・東名高速の高架をくぐると、すぐに右前方の細道へ、進むと昔の街道の松並木……現在は一本松 写真の通り JR 吉原駅の案内を右手に見ながら、左手に大きな煙突 日本製紙富士工場 ここで、東海道線を渡る。この辺が“元吉原宿跡” 浜辺に近いだろうが、建物と松林で、海も見えない。



「田子の浦ゆうち出てみればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」万葉集で有名な、奈良時代の歌人・山部赤人が役人として東国に向かう途中、田子の浦で詠んだ歌です。丁度 JR 吉原駅の西に、田子の浦港があり、そこに碑が設けられています。(後で気が付きました) ここからは東海道線を左に、見えない海岸線を右に、その間を、ただ東に向かうのみ。

### お着き JR 東田子の浦

相変わらず 左に JR の線路・右には民家の向こう松林…R380 を東に進む。「檜」の交差点横に道標があり、ここで小休止をする。更に東に向かう、“昭和放水路”に出会う。当時線路の北側は、「浮島沼」と呼ばれる湿地帯だったのを増田平四郎が排水路を設け新田開拓に尽力した。ここに“増田平四郎の像”が建立されている。一寸



離れて“一里塚”(写真)の碑が、ひっそりと建っている。やがて左側に「立園寺」尾張藩の柴田影浩が富士山の素晴らしさを称賛し“望嶽の碑”を建立した。先方に“六王子神社”その手前を左折すると目的のJR東田子の浦だ。今日の旅は、the END。

時刻表を確認中に、電車は出る。駅前には何もない。神社の秋祭り、空腹には余計にうつろ！やがて13:19の電車で「JR富士」に向かう。そして駐車場へ 予定の時間だ。今日の歩きはここまで！ 歩数28715歩。

## 富士山



「あたまを雲の上に出し 四方の山を見おろして……」明治44年(1911)に尋常小学唱歌としての富士山を、最も近くで眺められる…期待に胸躍らせてカメラを構えた。前回の“薩埵峠”では、左の写真のようになるはずが…霞か霧か？うまく映らない。(これは由井宿のパンフレットから拝借)今回 多くのシャッターチャンスに恵まれたが、時期が悪い！雪がない！それでも、雄大さは感じられる。



“富士川橋”(写真右)・“雁堤”(写真左下)・“鶴芝の碑”(此处から雪の富士山を眺めると、鶴が舞っている様に見える所があり、鶴芝とよばれたそう？しかし今は建物が邪魔し、何も見えない)・“左富士”(一応写真に 遠くてわかりづらい)(写真中央下)・“富士塚”(天香具山と呼ばれる丘の上にある塚。登山者は、登山の前



に、鈴川で禊を行い、浜の石を積んで、身の安全を祈願したらしい。山部赤人歌碑は、湊の向こう…今回パス)・“望嶽の碑”(写真右下)と 先人たちが絶賛した場所に立ったが、ほとんどが失望に近い。なぜなら 頭に帽子(雪)がない。草木なし。岩石だけが目につく 禿山だ！

富士山の表・裏は、どうなっている？ 文化11年(1810)「甲斐国志」によると「静岡県から見た富士を南面とする」と記載されている。 頂上の“浅間神社”の向きでは？

お山の、南から見た稜線のカーブ素晴らしい。心が休まる。でも安心できない！なぜなら 富士山は活火山だから！いつ爆発してもおかしくに！

車に乗り 「JR富士」を出たのが、13:30 お腹は空いているが、出来るだけ先に進みたい。富士ICより高速に乗り、途中新東名に移る。新しい道 車は少ない 走り良い。結局 浜松北SAまで走る。ここで掻揚うどん(¥680)の昼食 ちょっと寂しい？ でもお腹は満足 やがて三ヶ日JCTで東名高速に戻る。割に早く進んでいる。「土山SA」に着いた頃には、夜のとばりが降りている。薄暗い電燈の元、路銀の清算し、先に！ 渋滞に巻き込まれず、巨椋ICからR1へそのまま枚方まで。自宅の前で、降ろしてもらおう。皆に別れを告げ、我が家に到着 時刻は19:30

まだ 田中慶秋法務大臣の去就云々ともめている！ 何とかして！ 新聞に面白い記事を発見 私が来たからとて、それで この内閣が、よくなったのか

立ち去るからとて、それで この内閣に、輝きが増すのか？

この耳は、誰のくちからも、聞きはしなかった

わたしが、なぜ この内閣に来て、そして 立ち去って行くのかを！ (おわり)



# “お江戸日本橋へ”

第24回

平成24年10月13日から14日

薩埵峠の麓より 由比宿・蒲原宿・吉原宿  
もう少し  
足を延ばして東田子の浦まで！

JR 由比 → 3.3 km → 由比宿 (16) → 3.3 km

→ 蒲原宿 (15) → 11.2 km → 吉原宿 (14) → 6.6 km → JR 東田子の浦

1:30,000  
0 250 500 750 1000 1250m  
距離は約1000mの単位で表示されています。

